

バートランド・ラッセルの 確定的記述について

吉 田 謙 二

「記述の理論」theory of description は、確定的記述 definite description を含む文 sentence の分析をする際に有効な理論である。バートランド・ラッセル Bertrand Russell (1872-1970) は、どんな事柄でもこれを記すことは記述 description とよび、記述を不定的記述 indefinite description と確定的記述 definite description とに分ける⁽¹⁾。不定的記述とは、「あるしかじかのもの」a so-and-so という記述句であり、確定的記述とは、「くだんのしかじのもの」the so-and-so という記述句である。たとえば、「日本の現首相」とか、「最小の素数」とかは確定的記述であるが、「フランスの現国王」とか、「丸い四角」とかは不定的記述である。確定的記述には、独自の対象を記述している場合とそうでない場合とがあり、さらに、それに応じて分類が考えられる。すなわち、〈日本の現首相〉という記述は、〈中曽根康博〉を独自の対象としているけれども、〈プリンキピア・マテマティカの著者〉という記述の対象は、ラッセルとホワイトヘッドであるから、前者は適格の proper 確定的記述であるのに反して、後者は欠格の improper 確定的記述であるという。

すると、ラッセルの記述の理論に前提されているのは、記述の適格性が記述を含む命題の内容の一部を形成するということであり、欠格の記述を

含む命題は、ラッセルに従えば偽とされねばならない。〈フランスの現国王は禿頭である〉という命題は、そもそも〈フランスの現国王〉という記述句の独自の対象が無いのであるから、その真理値は偽である。しかし、欠格の確定的記述がなぜ成立するのかといえば、単に偶然的な語の連鎖として可能なのではなく、やはりなんらかの対象の記述として成立しているからであると考えられる。それはむしろ、あらかじめ選択された対象を独自の記述しているのかもしれない。そうであるとすれば、欠格の確定的記述を含む命題も真であるということになる⁹⁾。端的に言えば、欠格の〈かくかくはしかじかである〉という命題は、〈唯一のものがかくかくであり、しかも、それがしかじかである〉という命題の一例だというわけである。こう考えると、欠格の確定的記述を含む命題は、たとえ有意義であってもなにを記述しているのか一意的に決定できないから、その真理値は偽であるとするか¹⁰⁾、あるいは、あらかじめ選択された対象を記述しており、その真理値は真であるとするか、完全に矛盾する選択を迫られる。そこで、この小論は、ラッセルの確定的記述にまつわるこのような矛盾的な事態を克服する方策の探究を課題とする。

I

“On Denoting”を著す以前には、ラッセルは、確定的記述をなにかの意味を担うものとし、その意味は当の確定的記述を含む命題の構成要素であることとして理解した。そして、外延は、意味と対象との間の関係として解釈された。したがって、たとえば、「吉田茂は第二次世界大戦後の日本の首相であった」という命題が確認されるのは、「吉田茂」という確定的記述がこの命題の構成要素であるかぎりでは意味をもち、その外延は「第二次世界大戦後の日本の首相」と記述される対象との間の関係である。

“Principia Mathematica”において、確定的記述は、「ただ一つのしかじかのものがある、それがいないときの出来事に適用されるだけである。したがって、一つの記述は、 x の一つの値によって満足され、それがいないの値によっては満足されないような命題函数 ϕx を要求する。⁽⁴⁾」すなわち、確定的記述は、命題函数 ϕx を満足すると x の値であり、唯一の出来事を意味する。だから、「『 ϕx を満足する x 』は、ある一定の対象を確定的に記述する記述である。もっとも、それがどんな対象を記述しているのかは知られない。⁽⁵⁾」しかし、 $\vdash (x) \cdot \phi x$ 、 $\vdash (\exists x) \cdot \phi x$ が認められるかぎり、それはすべての x について ϕx が真であれば、 ϕx はときとして真であることを意味するから、そこにはなにかが存在しているという仮定が含まれていなければならない⁽⁶⁾。たとえば、「 y がある男であれば、『 x は y の父である』は、一つの対象にとって、しかも、ただ一つの対象にとって、つまり、 x の値にとって真であるに違いない。⁽⁷⁾」したがって、「 y の父」の存在は措定されていると考えなければならない。ところが、「 y の父」は、ある一定の男の記述であるが、どんな男を記述しているのかは解らない。つまり、その存在が措定されている y の父は、実は、「 y の父」という記述の意味とこの記述の対象との間の関係として外延されているのであって、 y の父に当たる存在は判明なものではない。

ところで、 x が一つの記述であれば、「 x は実在しない⁽⁸⁾」という命題函数は、 x が何物をも記述していないときにかぎって真である。すなわち、「 x は実在しない。そして、 x は非実在のあるものである⁽⁹⁾」という命題函数はときとして真なのである。というのは、この場合、 x は、記述された対象として存在性を有するだけであって、「けっして何物をも記述しない不定の記述であり、非実在のあるものを記述する不定の記述ではない⁽¹⁰⁾」からである。したがって、非実在的なものの認知は、「 x は実在しない」といった命題函数が、「ときには真になるということから導かれる⁽¹¹⁾」の

であって、非実在の存在によるのではない。不定的記述の非実在は、不定的記述に一致するどんな x もないことによって可能であり、したがって、また、不定的記述が可能なのは、「 x はあるしかじかのものであるという命題函数が、ときとして真であることもある場合⁽⁹⁾」である。換言すれば、「 x が一つの名前で、 x はあるしかじかのものであるという命題函数がすくなくとも一つは真である場合、それが存在する⁽¹⁰⁾」のである。したがって、「 x はひとである」という命題函数は、同一形式の無数の命題が可能であるのに反して、確定的記述を含む同一形式の命題は、「 x はくだんのしかじかのものである」という命題函数になり、「すくなくとも一つの値に対しては真となる可能性がある⁽¹¹⁾」。

ラッセルによれば、確定的記述を含む命題は、つぎのように定義される。

すなわち、「(1) $\phi(x)$ はつねに『 x は c である』と同値であり、(2) $\phi(x)$ が真であるような一つの要素 c がある⁽¹²⁾』という命題が、「 $\phi(x)$ を満足する一定の要素は $\phi(x)$ を満足する⁽¹³⁾』という命題の意味である、と。

一般的に言えば、『くだんのしかじかの』ものは、つねに、ある命題函数、すなわち『あるしかじかのもの』を形成する性質を定義する命題函数に関連している⁽¹⁴⁾ から、「 $\phi(x)$ 」と『 x は c である』とはつねに同値であるような一つの要素 c がある⁽¹⁵⁾』という命題は、「函数 $\phi(x)$ を満足する一定の要素があるということの別言である。

この定義を用いると、たとえば「源氏物語の著者は日本人である」という命題は、 c が日本人を意味するものとすれば、(1) x は源氏物語を書いたと『 x は c である』とはつねに同値であり、かつ(2) c は日本人であるような一つの要素があるという命題によって定義できることは明白である。

以上に概括したところから「記述」についてはつぎのように理解してよ

だろう。すなわち、不定的記述は、命題函数 $\phi(x)$ を真ならしめる x が有する性質を有し、確定的記述は、 $\phi(x)$ を満足するただ一つの値であり、その値は、「 x は c である」という命題函数と同値になる一つの要素 c である。したがって「円い四角」や「黄金でできた山」という記述の対象の存在は問題にならない。というのは、「黄金でできていてしかも山であるようなものが存在している」、あるいは、「円であってしかも四角形であるようなものは存在しない」という命題に置換してみると、命題函数 $\phi(x)$ を真ならしめる x はありえないことが明らかであるからである。文章の文法的構造がその論理的構造と同一であり、黄金でできた山といったものが存在を有するという考え方は、「 x は実在しない」という命題が、 x が何物をも記述していないときにかぎって真であるという命題によって、まったく誤りなのである。

ところが「 ψ の父」についてさきに述べたように、確定的記述については、それを含む命題函数がすくなくとも一つの値について真となる可能性があると言われ、存在と不可分であるかのごとく語られていながら、その証明は行なわれていない。 $\phi(x)$ はつねに「 x は c である」と同値であり、 $\phi(x)$ が真であるような一つの要素があるということが、 $\phi(x)$ を満足する要素があることの定義として認められるからといって、要素 c の存在性がそのまま端的に自明であるのではない。

II

一つの記述句がある命題に含まれているとき、この命題の単一の構成要素に対応するものがなにもなくて、命題が十分に分析されるなら、その記述句は消えてしまう。たとえば「丸い四角は存在しない」という命題は上に示した分析によって真であると理解されよう。しかし、「丸い四角」と

いう対象の存在がその真によって否定されるわけではない。ところが、「丸い四角」という記述が可能であるから「丸い四角」が存在するとはいえないのは、「雪女」という記述が雪女の存在を保証しないのに等しい。つまり、ある命題の主語の記述しているものの存在を否定しても、その命題が無意味にならなければ、当の主語は存在する対象を表わす名前ではない。だから、そのような場合、主語は消去できるように分析されねばならず、したがって、「丸い四角は存在しない」という命題は、「丸であってしかも四角であるような対象 x があるというのは偽である」という命題に置換される⁹⁾。

ラッセルに従って、「 ϕx を満足する名辞 x 」を “ $(\exists x)(\phi x)$ ” で表わせば、 $(\exists x)(\phi x)$ には具体的な対象の存在が措定される。ところが、いま命題を $f\{(\exists x)(\phi x)\}$ とすれば、われわれに確言できるのは、 $\phi x \equiv x=c$ のとき fc だということである。つまり、「『 ϕx を満足する x は fx を満足する』が意味するはずのものは、『 x が c であり、 fc が真であるとき、そのときにかぎって ϕx が真であるような対象 c があるということである。』」このことは、記号で表現すれば、 $f\{(\exists x)(\phi x)\} \equiv (\exists c) \phi x \equiv x=c \cdot fc$ と定義され¹⁰⁾、 $(\exists x)(\phi x)$ は完全に消去される。したがって、 $(\exists x)(\phi x)$ はたんなる記号であって、ふつう文字が導入される際に仮定されているようなある対象を表わさないと理解しなければならない。言い換えれば、“ $(\exists x)(\phi x)$ ” そのものはなにも意味がなく、命題函数 fy の y に置換されて有意味な命題になる。

「丸い四角は存在しない」という命題の解釈にある種の困難を感じるのは、われわれが「丸い四角」をこの命題の主語であると無意識に仮定しているからである。先述のようにこの困難は、「丸であって四角であるような x 」と分析されることによって克服されるので、「われわれの文法的直観の再構成と存在論的直観の再構成が等しく同性質であることが解るかぎ

り、存在論的構成を文法的構成と融合することは無害である。しかし、われわれの文法的先入見がわれわれの諸観念を支配するかぎり、ラッセルの方法において達成される論理的完全性は満足されないで残るだろう。⁸³⁾

ところで、記述句はつぎのようにして消去することもできる⁸⁴⁾。すなわち、(1) $[(\lambda x)(\phi x)] \{ \phi (\lambda x)(\phi x) \}$ は、 $(\lambda x)(\phi x)$ を消去すると、(2) $(\exists c) [(x)(\phi x) \equiv (x=c)] \cdot (\phi c)$ と表わされるが、記述句を含む命題が (3) $x \{ \phi (\lambda x)(\phi x) \}$ という形式であるとすれば、(4) $x \{ (\exists c) [(x)((\phi x) \equiv (x=c)) \cdot (\phi c)] \}$ として $(\lambda x)(\phi x)$ は消去される。ここでは論理的に完全な言語の概念について反省を加えるのが目的ではないから、この消去はプリンキピア・マテマティカで定義され、導出されている命題⁸⁵⁾に一致することを指摘するにとどめよう。たとえば、

14.02 $E! (\lambda x)(\phi x) \equiv (\exists b) \phi x \equiv_{\alpha} x=b$ Df は、「 ϕx を満足する x が存在する」という命題は、 ϕx が x の唯一の値によって満足されるとき、そのときにかぎって成り立つことを定義するものである。そして、

14.1 $\vdash \neg (\lambda x)(\phi x) = (\lambda x)(\phi x) \equiv (\exists b) \phi x$
 $\equiv_{\alpha} x=b \cdot b = (\lambda x)(\phi x)$

$\equiv_{\beta} (\lambda x)(\phi x) = (\lambda x)(\phi x) \vdash Prop$ では、 $(\lambda x)(\phi x)$ は、それが “ $(\lambda x)(\phi x) = (\lambda x)(\phi x)$ ” において一次的に生起しているから、 $(\lambda x)(\phi x)$ の前に消去されることを示しており、当然、“ $(\lambda x)(\phi x) = (\lambda x)(\phi x)$ ” なら、 $(\lambda x)(\phi x)$ がまず消去される。この消去の順序は真理値に違いを生じないはずである。また、

14.15 $\vdash (\lambda x)(\phi x) = b \cdot \vdash \phi \{ (\lambda x)(\phi x) \} \equiv \phi b$ は、 $(\lambda x)(\phi x)$ があるものを表わしていれば、 $(\lambda x)(\phi x)$ を含む命題が $(\lambda x)(\phi x)$ の表わしているものの命題に等しいことを論理的に含意している。すると、 $(\lambda x)(\phi x)$ を含むものの命題が、ラッセルの用いた例の「ジョ

ージⅣ世は、スコットがウェーヴァリーの著者であるかどうか知りたかった。」という命題であるとすれば、(2)は、ただひとりのひとがウェーヴァリーを書き、ジョージⅣ世はそのひとがスコットであるかどうか知りたかった、という意味であり、ジョージⅣ世は、スコットはスコットであるかどうかを知りたかったということがほかの前提から帰結する。「スコットはウェーヴァリーの著者である」は $b = (\lambda x)(\phi x)$ と書けるが、これと $\phi(\lambda x)(\phi x)$ という前提をとれば、上の14.15を得られるはずである。

こうしてみると、記述の理論は、文脈的定義によって、存在の特性を記述するのに必要でないような概念を消去するものであるから、論理的に完全な言語においては、記述句は現われず、限量詞とか、変項とか、論理定項とかによる表現だけが残ると思われる⁸⁹。すると、記述は存在とは無縁だとも言える。記述の外延が存在しないような場合についての想定は、記述句とそのラッセル流の分析とに関する矛盾に関係するものではないと解釈できようし⁹⁰、また、ストローソン Strawson のように、記述句の言及する対象の存在は前提されており、対象が存在していなければ、記述句を含む命題は、真理値を欠いた表現を行なうために用いられているのだと見做すこともできよう⁹¹。また、記述の理論の重要な帰結は、存在が命題関数の属性として扱われるということであり、存在する対象は、満足される命題関数に依存すると理解できるから⁹²、クワイン Quine のように、「存在することは変項の値であることだ⁹³」と把握できましょう。

文法が実体的存在を要求する場合、論理的に完全な言語を得るためのラッセルの方法によれば、「二つの机がある」という命題は、「一つの机があり、もう一つあり、ほかにはない」という翻訳が行なわれよう。この翻訳自体は表面上なにも問題ないように思われるが、そのような言語的置換は、確定的記述の対象の存在の不確定性を内包している。ラッセルの認識論的格率はオッカムの剃刀であり、「可能なときはいつでも、推論された

実体に論理的構成体を置換するべきである。⁶⁰⁾」と述べられる原理である。この原理を用いて、たとえば、基数は所与の集合の基数と考えられ、「基数とは所与の集合に相似なすべての集合の集合ということになり、「基数」にあたる実体の集合を推論する必要がなくなる。このように、数学的実体概念については、ラッセルも フレーゲの方法に依っているにもかかわらず、ラッセルはフレーゲの存在論的構成の意味を理解し損ねたように思われる。というのは、オッカムの剃刀を実体概念の数を極小にするのに有効な原理とするあまり、「みずからの言語的置換の方法と存在論的構成の方法との区別が、ラッセルにとってはそれほど明確ではなかったからである。

確定的記述にまつわる欠格の記述の問題は、筆者の信ずるところによれば、言語的置換の方法と存在論的構成の方法との区別が、ラッセルにあってはあいまいなままであったという点にあり、問題解決の糸口もまたここにある。しかし、欠格の確定的記述にからむ矛盾は、記述の真偽をめぐって顕在化するものであるから、それに取りかかるまえに、ラッセルの真偽にかかわる理解を明らかにしておこう。

III

われわれの行う判断には、「すべての人間は死ぬ」とか、「わたしはあるひとに会った」とか、「あるひとびとは日本人である」とかというものと、「その主語がつねに特殊で限定的である⁶¹⁾」ものがある。本論の目的にとっては、後者の判断が確定的記述に対応するから、これに限ってラッセルの所説を概括すればよからう⁶²⁾。

宇宙は多様な性質をもち、多様な関係に立つ対象から成っている。宇宙において生起する対象が複雑であるとき、それは、内的に関係した諸部分から成っている。関係Rに立つ二つの部分aとbとから成る複雑な対象

は、知覚される場合一つの対象として知覚される。しかし、知覚に注意を払えば、知覚的な判断が成立し、その際は、 a, b, R 、および知覚者の四項の間の関係が成り立っている。ところが知覚は、関係 R に役立つ a, b と知覚者との関係である。「知覚の対象は無であることはできないので⁽⁸⁾」知覚判断は真でなければならない。けれども、この判断が知覚されたものの分析によって引き出されたとき誤まっているかもしれないから、知覚に由来すると思われる判断において、われわれが誤まることはないとは考えられない。しかし、ラッセルは、知覚判断に関する場合、真を「その判断である推論的思想に対応する複雑な対象があるという事実⁽⁹⁾に存すること⁽¹⁰⁾」と定義する。すなわち、『 a は b に対して関係 R を有する』を判断するとき、われわれの判断は、複雑な対象『 b に対して R という関係にある a 』があるとき、真であるといわれ、そうでないとき、偽であるといわれる。⁽¹¹⁾

真偽に関するラッセルのこのような定義は、かれの素朴实在論の立場からして当然のものであると思われるが、これを表面的に単純な真偽の实在対応説と解釈してはならない。というのは、ラッセルは、認識に関しては、一貫して論理的原子論者であり、上述のように、知覚判断の真を推論的思想に対応する対象の存在に基づき、対象の存在に対応する推論的思想に基づけていないからである。

ところで、また、真偽の上のような理解は、ある一つの判断には単一の対象だけしかないのではなく、数個の内的に関連した対象がある、ということの意味している。つまり、われわれが「これは赤い」と判断するとき、われわれの「精神」と「これ」「赤」との関係が成立していると考えられるから、判断を構成する関係は、二項関係、すなわち、判断する精神と当該の命題との関係ではなく、数項関係、すなわち、精神と当該命題の構成要素とよばれるものとの関係である。ところが、われわれが「このものの赤さを」知覚するときは、われわれの精神とその赤さという複雑な対象と

の関係が成立していると考えられるから、知覚を可能にする関係は二項関係である。しかし、判断であれ、知覚であれ、いずれにしても成立するときは、「多様な対象からなるある複雑な実体が存在する。⁶⁰⁾」それゆえに、判断や知覚が真とされるのは、対応する複雑な対象があるときであり、それらの偽は、その対象を構成するような対応する複雑な対象が無いことに存する。だから、真偽の徴標は対象的存在である、というのがラッセルの定義に含まれている基本的な考え方であろう。

したがって、ラッセルが、「ひとびとを導いて思想を『推理的』であると語らせてきたのは、判断の対象がいくつかあることである⁶¹⁾」と言い、「単一の判断の対象の複数性のために、われわれが『命題』とよぶものは、まったく単一の実体ではないということがついで生じる⁶²⁾」と述べるとき、意味されているのは、推理的思想が判断の対象を象徴するものではなく、命題が複数の対象を象徴する実体ではないということである。ここで確定的記述が、命題の構成要素であることを憶い起こせば、このことは本論の課題にとってきわめ示唆に富んでいると言わねばならない。

存在をわれわれの観念や判断の徴標もしくは象徴とするのと同様の常識とは逆転した考え方は、ラッセルの天才による業績である階型理論にも貫徹されている。階型理論は、いわば不当な全体性を回避できるようにする原理を根幹とし、その原理は、「ある集合のすべてを含むものはどんなものでも、その集合に含まれるものであってはならない⁶³⁾」と表現される。いまは、この原理の当否を論じるのが目的ではなく、それが必要とされる事情が重要である。ラッセルに従えば、その概略はつぎのように述べられる。すなわち、たとえば、命題の集合は、「すべての命題は真か偽かのいずれかである」という命題を含んでいると仮定できる。しかし、その言明は、「すべての命題」がすでに定まった集合に言及しているのでなければ、正当なものではないから、無意味である。一般的にいえば、対象の集合が

与えられたとき、この集合に全体があれば、その集合は全体を要素とするから、そのような集合には全体がない。ある集合に全体がないというのは、その集合のすべての要素について有意味な言明をすることができないということである。この場合、その集合を、当の集合より小さい部分に分割して、それぞれが全体でありうるようにすれば、小さな部分的全体はそれよりも大きな部分的全体によって言及される。

ラッセルが対象の集合と言うとき、もちろん対象的存在だけを意味しているのではなく、命題の集合も含まれる。だから、階型理論に貫徹されているのは、特有の論理的思考法である。集合の全体が与えられるなら、普通はその全体性が当の集合を判明に定義すると思われるが、全体によってしか定義できない集合を要素とする集合は全体を失わねばならないという論理が、全体を部分に置換する論理主義の徹底によって克服されるのは、命題の構成要素としての欠格の確定的記述の真偽の相克を素朴實在論の論理的徹底で解消しようとするに等しい。

IV

直観的な見方によれば、ある命題の論理的形式はその文法的形式の鏡影である。ある表現の文法的に正しいのは、その表現が文法的に単純な構成要素から形成規則に則って「構成される」ときである。そのような構成は当の表現に文法構造もしくは文法的形式を割り当てる。文法的関係を説明することは、その文法的形式を示すことである。名詞節であるとか、所与の命題の主辞であるとかいうような文法的諸性質や諸関係が問題とされている表現の文法的形式に依存しているのとちょうどおなじように、妥当であるとか、所与の命題の論理的帰結であるとかいうような論理的諸性質や諸関係は問題とされている表現の論理的形式に依存している。論理的形式

は言語のなんらかの評価規則によって決定されるはずであり、これらの諸規則がわれわれに教えるのは、ある表現の意味論的価値を、その表現の論理的に単純な構成要素によって「構成する」方法である。

ある命題の真理値のそのような構成は、ある命題についての文法的説明がその命題の文法的形式を示す仕方に似た方法で、当の命題の論理的構造、もしくは論理的形式を示す。日常言語において、文の見かけの文法形式を変えない置換、たとえば、個有名を「あるひと」someone で置換することは、その操作を加えた文のあいだの論理的帰結の諸関係を導入したり、抹消したり、したがって、論理的形式の変化を示唆する⁶⁹⁾。

ラッセルとフレーゲはともに日常言語の論理的不完全性を取り除くことに関心があったが、その方法はまったく異なっていた。論理主義を貫徹けば、なんらかの翻訳規則を文脈的定義の説明のために仮定することが必要であり、その定義にしたがえば、確定的記述は完全な言語においてはまったく生じない。文法が本性の漠然とした実体的存在を要求する場合、フレーゲは、数の場合のように、構成を企てた。だから、フレーゲは、存在論的な考案によって日常言語の元のままの状態を保存しようとしたが、ラッセルの対応の仕方は、すくなくとも確定的記述の場合には、文法的再構成と置換であった⁷⁰⁾。

しかし、ラッセルの構成主義的な文法的置換にかかわるあいまいさは、ただちに存在論的解決を示唆していると思われる。すなわち、ラッセルによれば「實在感にしたがえば、命題の分析に際しては、なんら非實在的なものは許容されるべきではない⁷¹⁾」のであるから、欠格の確定的記述についてもその方向で理解する方途を探さねばならない。一般に、伝統的な主語・述語論理に従えば、先述のように文法的形式がもっとも重要な指標である。したがって、「わたしは太郎に会った」と「わたしはあるひとに会った」という二つの命題は同一形式の命題であると考えられている。とこ

るが、「わたしは太郎に会った」と「わたしはあるひとに会った」とは同一形式の命題であると考えられていた。しかし、後者は、『わたしは x に会った、そして x はひとである』という命題函数はときとして真である⁴³⁾と換言できるのに反して、前者は実在の人物である太郎を名指しており、形式は、「わたしは x に会った」というにすぎない。「わたしはあるひとに会った」という命題は、「あるひと」が太郎を意味しようがしまいが、人間についてのなんらかの定義を知っているすべてのひとに理解される。つまり、この命題には、実際の人間が要素として含まれているのではなく、ひとという一般概念が要素になっているのである。したがって、明らかに、「わたしは太郎に会った」と「わたしはあるひとに会った」とは、まったく異なる命題である。「わたしは雪女に会った」という命題も、わたしは x に会ったという形式によって可能なのである。⁴⁴⁾

したがって、われわれはこう結論できる。すなわち、命題の論理的分析の指標に命題の意味を取れば、命題の要素になっているのは、概念であって、実在の雪女ではない。だから、われわれにとって実在的であるのは概念である。ラッセルによれば、「われわれにとって存在するのは、唯一の世界すなわち実在の世界であり⁴⁵⁾」、ひとびとがハムレットを読むときに体験する感情や思想、あるいは、シェイクスピアの想像が実在の世界の一部である。だから、確定的記述は、適格の記述であっても欠格の記述であっても、ラッセルの言うように、論理学が「実在の世界をありのままに取り扱うものである⁴⁶⁾」かぎり、その真理値を偽とする解決策は採れないし、あらかじめ選択された対象を措定しても欠格の記述の対象の一意的な決定不能性が克服されるわけではない。むしろ、実在感にしたがえば、シェイクスピアの想念が存在し、われわれの概念が実在しているのであるから、それらの想念や概念も論理学の扱うべき実在の世界の要素でなければならぬ。したがって、冒頭に述べた欠格の確定的記述にまつわる真偽相反す

る選択は、実はほんらい矛盾的ではない。というのは、そのような矛盾は、確定的記述がその記述によって記述されている対象の記号であると解釈し、欠格の確定的記述はそれによって記述されている対象の存在が判明でないと理解するところに由来するが、記述の意味するものの存在を主張できるのは、「もっとも抽象的な研究にも保持されるべき実在感⁽¹⁾」が記述の基礎にあるときであるとするれば、欠格の確定的記述の対象の側に存在性を求めることは無意味であり、欠格の確定的記述そのものがわれわれにとって実在しているものだからである。約言すれば、欠格の確定的記述が存在であって、欠格の確定的記述の対象は存在ではないのである。それであるからこそ、不定的記述の「丸い四角」は「丸であって四角であるもの」という言語的置換が有意味なのである。また、記述の消去が可能であるのは、確定的記述が適格のものであっても欠格のものであっても、記述が対象的存在であるからである。記述の対象の存在が関わっていれば、その存在は消去できるはずがないのである。 $(\exists x)(\phi x)$ はたんなる記号であり、われわれが文字や概念を導入するときふつう仮定されているような対象の存在を表わしておらず、命題関数 f_y の y に置換されるときにかぎって有意味なのである。だから、欠格の確定的記述は、対象的存在の記号ではなく、対象的存在がわれわれにとっての存在としての欠格の確定的記述の記号なのである。言い換えれば、記述が存在の象徴なのではなくて、存在が記述の象徴なのである。この観点に立てば、欠格の確定的記述も実在感を保持し、しかも、その真偽は記述の記号としての対象的存在との関連で決定されるはずである。

註

- (1) cf., Bertrand Russell, "On Denoting," *Mind*, vol. 14, 1905. Reprinted in Russell's *Logic and Knowledge*, by R. C. Marsh, (London, George Allen & Unwin, 1956), pp. 41-56.

- (2) cf., Gottlob Frege, "Über Sinn und Bedeutung," *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, vol. 100, 1892. Translated as "On Sense and Nominatum," in *Readings in Philosophical Analysis*, ed. by H. Feigl and Sellars, (New York, Appleton Century Crofts, 1949), pp. 85-102.
- (3) cf., Arnold Whitehead & Bertrand Russell, *Principia Mathematica*, 2nd, ed. vol. I, (Cambridge, Cambridge University Press, 1925), 以後 P. M. と記す。なお、この小論の記述句に関する解説的な部分については、人文学第137号所収の拙論「バートランド・ラッセルの記述の理論における『記述句』について」の文言を修正して用いたので、関連するほかの事項についてはそれを参照されたい。
- (4) *ibid.*, p. 30.
- (5) cf., *ibid.*, p. 19.
- (6) cf., *ibid.*, 30.
- (7) *ibid.*, p. 30.
- (8) x is unreal.
- (9) Bertrand Russell, *Introduction to Mathematical Philosophy*, (London, George Allen & Unwin, 1919), p. 170. 以後 I. T. M. P. と記す。
- (10) *ibid.*, p. 170.
- (11) *ibid.*, p. 170.
- (12) *ibid.*, p. 172.
- (13) *ibid.*, p. 172.
- (14) *ibid.*, p. 172.
- (15) *ibid.*, p. 178.
- (16) *ibid.*, p. 178.
- (17) *ibid.*, pp. 177-178.
- (18) *ibid.*, p. 178.
- (19) cf., P. M., p. 66.
- (20) *ibid.*, p. 68.
- (21) *ibid.*, p. 68.
- (22) David Kaplan, "What is Russell's Theory of Description," in *Bertrand Russell—A Collection of Critical Essay—*, ed. by L. T. Pears, (New York, Doubleday, 1972), p. 241. 以後 W. R. T. D. と記す。
- (23) Leonard Linsky, "Reference and Referent," in *Essays on Bertrand Russell*, ed. by E. L. Klemke, (Chicago, University of Illinois Press, 1970), p.227.
- (24) cf., P. M., pp. 173-179.

- (25) cf., R. J. Clack, *Bertrand Russell's Philosophy of Language*, (Hague, Martinus Nijhoff, 1969), p. 53.
- (26) cf., R. M. Sainsbury, *Russell*, (London, Routledge & Kegan Paul, 1979), pp. 116-122.
- (27) cf., Max Black, "Russell's Philosophy of Language," in *The Philosophy of Bertrand Russell*, ed. by P. A. Schilpp, (New York, Tudor Publishing Company, 1944), pp. 227-255.
- (28) cf., A. J. Ayer, *Russell*, (London, The Woburn Press, 1974), pp. 59-60.
- (29) W. V. O. Quine, *From a Logical Point of View*, 2nd ed. (Massachusetts, Harvard University Press, 1964), p. 15.
- (30) Bertrand Russell, *Mysticism and Logic*, (London, George Allen & Unwin, 1917), p. 155.
- (31) P. M. p. 44.
- (32) cf., *ibid.*, pp. 41-44.
- (33) *ibid.*, p. 43.
- (34) *ibid.*, p. 43.
- (35) *ibid.*, p. 4.
- (36) *ibid.*, p. 44.
- (37) *ibid.*, p. 44.
- (38) *ibid.*, p. 44.
- (39) *ibid.*, p. 37.
- (40) cf., W. R. T. D., pp. 235-236.
- (41) cf., *ibid.*, pp. 239.
- (42) I. T. M. P., p. 170.
- (43) *ibid.*, p. 168.
- (44) *ibid.*, p. 169.
- (45) *ibid.*, p. 169.
- (46) *ibid.*, p. 169.